

土木の「原罪」を考える。

藤井 聡

「土木」という言葉は、民の暮らし向きをより良きものにするために「聖人」(知徳が高き人物)が為した「築土構木」(土地を盛り、木を組むこと)なる行為にその由来がある、だからこそ土木という言葉は民を思う聖人の徳高き行為を言うものなのだ——、これが前回の筆者の主張であった¹⁾。言うまでもないが、筆者にはその思いについての迷いは一点もない。しかしそれで土木という言葉の意味を言い尽くせたようにも感じてはいない。なぜなら、それだけでは「築土構木」に潜む「原罪」を言い表したことはないからである。今回は、前回の原稿と共にあわせてお読みいただければとの我が儘なる期待と共に、誤解を怖れず「土木の原罪」について考えてみたいと思う。

言うまでもなく「築土構木」のためには山を崩さねばならず、木を切らねばならない。しかしその山には太古からの人々の思いがあったやもしれぬし、その木は長い歴史を持つ重要な鎮守の森の一部であったやもしれぬ。しかし、かの「聖人」はそこに住まう民の暮らしのためにその山と木を切り崩してしまったのである。無論、その行為で民の暮らしが良くなったということはあり得よう。しかし、その行為によってかえって人々は心のよりどころを失い、その地がその地であるための風土が傷つけられてしまったやもしれぬ。だとするなら、この聖人の振るまいは良きことなのか良からぬことなのか。無論、真の聖人であるならそうした諸点を全て鑑み、築土構木の決断を為したに違いない。正確にいうなら、その聖人は「築土構木」に潜む「善」はそれに伴う「悪」を補って余りある程に大きなものであると予期したからこそ「築土構木」を決断したに違いない。しかしだからといってその行為に潜む「悪」が「悪」であることに代わり無い——。

ここに、「土木の原罪」がある。土木が土木である以上、その原罪から逃げおおすことなどできないのであり、それは太古の昔も今も何ら変わりなきところなのである。

では、その聖人は、自らがなした「悪」について如何に振る舞ったのだろうか。無論、その様子はその原著「淮南子」¹⁾に記載されてはいない。しかしおそらく彼は生涯、如何なる「悪」を自らが為したのかを忘れる事は無かつただろうし、機が訪れたのならそれを償うためになし得る全て努力を惜しまなかったことだろう。事実、土木の偉大なる先達の中には、その原罪を引き受けるべく務めた人物がいたことを私たちは知っている²⁾。しかし、現代の私たちは、そうした原罪を背負い、飲み込み、しかもそれを文化にまで昇華せしめるだけの精神の力を持ちあわせているのだろうか。無論、未だ我々はその力を持ち合わせているのだと信じたい。が、その「希望」は真なのか偽なのか——、まずは愚かなる我が身に改めて問いながら、この短い論考を終えようと思う。

(短い間でしたがこの四回お付き合いいただき、ありがとうございました。)

1) 藤井 聡：土木の「意味」を考える。土木学会誌, (印刷中), 2008.

2) 藤井 聡：小岩井農場と井上勝, 土木学会誌, 92 (3), p. 17, 2007.